日蓮大聖人御書全集

じびきぎしよ

地引御書

新版
1816
）
1817

地引御書

弘安 4 年 ('81) 11 月 25 日 60 歳 波木井実長

坊は十間四面に、またびさしさしてつくりあげ、二十四日

に、大師講ならびに延年、心のごとくつかまつりて、

二十四日の戌亥時、御所にすえして、三十余人をもつて

一日経かきまいらせ、ならびに申酉刻に御供養、すこし

も事ゆえなし。坊は地ひき山づくりし候いしに、山に

二十四日、一日もかた時も雨ふることなし。十一月

ついたちの日、しょうぼうつくり、馬やつくる。八日は大坊

柱立

このか

とおか葺

そうら

お

のはしらだて、九日・十日ふき候い了わんぬ。しかるに、

なのか

おおあめ

ようか

このか

とおか

曇

暖

七日は大雨、八日・九日・十日はくもりて、しかもあたたか

はる お

じゅういちにち

じゅうよつか

なること、春の終わりのごとし。十一日より十四日までは

おおあめ

おおゆきふ

いま

さと

消

やま

いちじょうにじよう

大雨ふり、大雪下つて、今に里にきえず。山は、一丈二丈

ゆき 凍

堅

金

にじゅうさんにち

よつか

雪こおりてかたきことかねのごとし。二十三日・四日は、

空 晴

寒

ひと

参

らくちゆう

またそらははれてさむからず。人のまいること、洛中・

鎌 倉

町

さる通りのとき

定

しさい

かまくらのまちの申酉時のごとし。さだめて子細あるべき

か。

じろうどのとう

おん

公

達

親

仰

もう

わ

こころ

次郎殿等の御きゆうだち、おやのおおせと申し、我が心

入 我 引 柱

に 入れて おわ します こと なれば、 われと 地を ひき、 はしらを

立 藤 兵 衛 右馬 にようどう さぶろうひようえのじようどう いげ

たて、 とうひようえ・むまの 入道・三郎 兵衛尉等、 已下

ひとびと ひとり 疎 略 義 ぼう 鎌 倉

の人々、 一人も そらくの ぎなし。 坊は、 かまくらにては

いっせんかん だいじ もう そうら

一千貫にて も 大事と こそ 申し 候え。

いちにちきよう くよう 止 そうろう ゆえ

ただし、 一日 経は 供養し させて 候。 その 故は、 御所念

かな たま そうろう くよう 果 そうら もう

の 叶 わせ 給いて 候 ならば、 供養し して 候 わん。 なにと 申

そうろう ご 祈 念 叶 ことば あ じつ

して 候 とも、 御き ねん かな わずば、 言の みに 有つて 実なく、

はな 咲 果 花さいて この みな ならんか。 いまも 御らん ぜよ。 この こと 叶 かな

わ ずば、 今度、 法華 経にて は 仏 になる まじき かと 存じ 候 わ

こんど ほけきよう ほとけ 成 ぞん そうら

かな

そうら

ふたり

寄

合

くよう

果

ん。叶つて候わば、二人よりあいまいらせて、供養しはて

そうら

かみ 習

禰宜

もう

まいらせ候わん。「神ならわすはねぎから」と申す。この

かな

ほけきようしん

何

ことごと

もう

こと叶わずば、法華経信じてなにかせん。事々またまた申す

そうらう

きようきようきんげん

べく候。恐々謹言。

じゆういちがつにじゆうごにち

にちれん

かおう

十一月二十五日

日蓮

花押

なんぶのろくろうどの

南部六郎殿